

2019年4月8日 その後の美濃金山城 森長可～森忠正

続いて可成の家督を継いだ森長可です。

永禄元年(1558年)、森可成(三左衛門)の次男として生まれました。元亀元年(1570年)に父・可成が戦死し、長兄の可隆(伝兵衛)も同年に戦死していたため、僅か13歳で家督を継いで織田信長に仕え、信長より一字拝領し**勝蔵 長可**を名乗りました。もちろん信長の配下として、元亀4年(1573年)3月、第二次長島一向一揆攻めに織田信忠の部隊に参加して初陣。翌天正2年(1574年)には第三次長島一向一揆攻めで長島城の寄せ手に参加し関成政と共に打って出てきた一揆軍を敗走させ、また、信忠軍と一揆が川を挟んで対峙した際には船で渡河して切り込み、一揆勢27人を討ち果たすなど優れた武勇を見せた^[1]。以後は信忠配下の与力武将として長篠の戦い、美濃岩村城攻め、越中国侵攻、摂津石山本願寺攻め、三木合戦などに参加し武功を挙げています。

天正10年(1582年)2月からの信長の甲州征伐では信忠本隊の先鋒部隊の将として、木曾口より信濃に侵攻。松尾城、飯田城、高遠城を落とし、上野国へ侵入。武田家滅亡後、同年3月21日、信長から恩賞として信濃川中島四郡と海津城20万石を与えられています。ちなみに長可の旧領である美濃金山は弟の成利(蘭丸)に与えられました。

信濃国の仕置きを済ませた長可は、上杉景勝が柴田勝家に攻められている越中魚津城の救援に向かったという知らせを受けて、天正10年(1582年)の5月23日に5,000の兵を率いて越後国への出兵を開始。越後国境付近の関川口の守りを突破し田切城(妙高市大字田切字東裏にあった城)を落として、上杉領深くまで侵攻した。6月までに春日山城からほど近い二本木(上越市)を守る上条景春を破り^[5]、同地に陣を張った。当時、春日山城の兵は殆ど魚津城の救援に向かっていた。手薄な春日山城に長可が肉薄すると、上杉景勝も春日山城防衛のために魚津城の救援を諦めざるを得なかった。景勝は5月27日天神山城の陣を引き払い春日山城へと兵を返す事となった。これによって景勝の援護を得られなかった魚津城は柴田軍の攻撃によって陥落し、上杉軍は越中国における重要な拠点を失うことになりました。

さてここが、森長可の絶頂期です。歴史のifですが、本能寺の変が、もう少し遅れていたら、森長可の信濃領国経営もうまくいったかも知れません。わずか2か月あまりにも時間が短すぎました。

天正10年(1582年)6月2日に本能寺の変で信長が討たれると、敵地深くに進攻していた長可は一転して窮地に立たされ、6月8日には二本木の陣を払って越後国から撤退。軍議を開いて信長の仇を討つことを決定しましたが、信濃国衆にも信長死亡の報が伝わっており、長可配下の信濃国衆たちは出浦盛清を除いてほぼ全員が長可を裏切り、森軍を殲滅する為の一揆を煽動していました。これに対し長可はまず海津城の人質を逃がさぬように厳命し、入城後はただちに人質を連れて南進した。長可の家臣・大塚次右衛門が一揆と交渉したが、一揆衆は森勢の前に立ちふさ

がったため、長可は合戦を仕掛け勝利し、森軍は松本に到着すると人質を残らず処刑し木曾谷方面へと撤退しました。

天正10年(1582年)6月24日に無事に旧領への帰還を果たし、翌日には岐阜城に赴き織田信雄、信孝、三法師に挨拶し弔辞を述べたというから、信長の死後無事に帰りついた武将としてたいしたもんだと思います。そして東美濃を統一します。

信長が滅びた後、滅んでしまった武将も多くありますが、盛り返して東美濃を統一したような武将は少ないと思います。そして、小牧・長久手の戦いです。

小牧・長久手の戦いのきっかけは長可が起こしました。羽黒の戦いにおいて、家康軍の酒井忠次・榊原康政・大須賀康高ら5,000人の兵にこっぴどくやられた長可は、舅の池田恒興を通じ、秀吉に岡崎城への中入りを提案、2万人超えの前代未聞の大部隊にて中入れが実行されます。そして、それを家康に察知され、池田恒興・元助親子と共に森長可は討ち取られています。

波乱万丈という言葉はこの人の為にあるかもしれません。信長・秀吉・家康の天下人にそれぞれ違った関係があります。その後、長可には玄蕃という嫡男がいたので、六男忠政への家督相続を望んではいないようでした。

しかし、秀吉は森可成の六男(末子)の忠政を美濃金山城主としました。

森忠正も美濃金山城では無く、慶長5年(1600年)、かねてから希望していた信濃川中島13万7500石へ転封。関ヶ原後、慶長8年(1603年)、小早川秀秋の死によって小早川家が無嗣改易されると美作国一国18万6,500石(津山藩)への加増、転封しました。

残念ながら津山藩主森家は5代目で無嗣断絶となりましたが、子孫の赤穂藩主森家は2万石で、幕末まで続き、明治になり子爵となり、分家の三日月藩主(1万五千石)森家も幕末まで存続し、子爵となったようです。